世を照らす光の到来

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24787

「世を照らす光の到来」

総合人文学科長　出村　みや子

ヨハネによる福音書　第九章一～一二節

1さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。」3イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。4わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。5わたしは、世にいる間、世の光である。」6こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。7そして、「シロアム――『遣わされた者』という意味――の池に行って洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行って洗い、目が見えるようになって、帰って来た。8近所の人々や彼

が物乞いであったのを前にみていた人々が、「これは座って物乞いをしていた人ではないか」と言った。9「その人だ」と言う者もいれば「いや違う。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそうなのです」と言った。10そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うと、11彼は答えた。「イエスというお方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行って洗いなさい』と言われました。そこで、行って洗ったら、見えるようになったのです。」12人々が「その人はどこにいるのか」と言うと、彼は「知りません」と言った。

主イエス・キリストが世を照らす光としてこの世に到来したことは、東北学院大学のスクールモットーである「地の塩、世の光」にも、また英語のLife, Light, Love For the Worldにも現れています。既に街角にはクリスマスの装飾が見られ、夜にはクリスマスのイルミネーションが点灯されていますが、東北学院大学で学ぶ皆さんには、クリスマスが元来は世を照らす光であるイエス・キリストのこの世への到来を記念し、祝う時であるとの意味が込められていることを覚えていただきたいと思います。

本日お読みした箇所には、主イエスが通りすがりに出会った生まれつきの盲人をいやした物語が伝えられています。福音書には、イエスが病気で苦しむ人々や、当時の世界観によれば悪霊に取り憑かれていると思われていた人々をいやされた記事が多く収録されています。医療施設や技術が発達した現代社会とは違い、イエスが出会った多くの貧しい人々は医者に治療してもらうことができず、困難な状態に置かれていました。このヨハネ福音書の物語は、イエスがなぜ救い主、メシアと信じられるようになったのかについて、私たちに色々と示唆を与えてくれますので、ひと時ご一緒に聖書から学びたいと思います。

まず皆さんに注目して頂きたいのは、二～三節の弟子たちとイエスとの会話です。イエスと伝道活動を共にしていた弟子たちが、生まれつき目の見えない人を見かけると、何と「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と尋ねたというのです。当時のユダヤ人の一般的な理解では、人が病気や不幸になるのは、ほとんどの場合は、本人が罪を犯したからであり、神様は罰としてその人を病気や不幸な目にあわせるのだ、と考えられていました。弟子たちもそうした当時の人々の見方を共有していたことになります。病を始め、様々な不幸に襲われるのは、何らかの罪の結果であると言った因果応報的な考え方は決して古代の人々だけのものではなく、何らかの形で現代の社会にも見られます。

宗教がらみの人の弱みに付け込んだ霊感商法や浄霊の被害が後を絶たないのもそのためではないでしょうか。

弟子たちの問いに対するイエスの答えは、障害を持つ人々に対する弟子たちの偏見を正す力がある全く新しい教えでした。それはまた、現代世界に生きる私たちの心の中にある様々な「バリアー」から私たちを解き放ち、いわば「心のバリア・フリー」へと私たちのまなざしを向けてくれるものです。イエスは弟子たちに対してきっぱりと、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」と、その誤りを指摘されたばかりではなく、「神の業がこの人に現れるためである」と告げました。ここでイエスが、因果応報的な考え方をはっきりと退け、生まれつき目が不自由であった人をいやしたばかりか、周囲の人々の偏見に満ちた考えからも解放したことは大変重要です。

次に四節以下をご覧ください。それからイエスは「わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。私は世にいる間、世の光である」と述べ、この日は安息日でしたが直ちにこの盲人の目をいやされました。イエスは土をこねて彼の目に塗り、シロアムの池で洗うようにと指示されましたが、こうした所作は原始的ないやしの伝承に多く見られるものです。シロアムの池の「シロアム」とは、ここで

は「遣わされた者」を意味すると説明されています。イエスは神から遣わされた者であるゆえに、安息日の主でもあるのです。

長い間目が見えないために、座って物乞いをする生活に甘んじていたこの人が、突然目が見えるようになって人々の前に現れたのですから、人々は驚いたに違いありません。なぜなら、聖書においてイエスが生まれつき目の不自由であった人をいやしたことには神学的に特別な意味があったからです。それは旧約聖書のイザヤ書に預言されたメシアの時代が到来したことを意味していたのです。ここでルカによる福音書四章一六節以下に記された、ガリラヤでのイエスの宣教が開始された場面を見てみましょう。「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目に留まった。

『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されていた人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである』」。

これはイザヤ書六一章の引用です。「油を注がれる」行為は古代イスラエルの王の即位式に由来し、救い主を意味する「メシア」とはまさに「油を注がれた者」を意味します。従ってイエスと

出会い、その力ある言葉と業を体験した当時の人々は、このイエスこそかつて預言者イザヤが予告した救い主メシアであると確信したに違いありません。当時視力の回復はまさに救い主メシアの業でありました。

この出来事に驚いた人々が、この盲人をいやした「その人はどこにいるのか」と尋ねましたが、彼は「知りません」と答えました。イエスは盲人をいやしてすぐにその場を立ち去り、決してその奇跡行為を誇ることをしませんでした。マタイ福音書一二章一五節以下によれば、この点もイエスが神によって選ばれた僕、救い主メシアであることを示しています。「イエスは皆の病気をいやして、ご自分のことを言いふらさないようにと戒められた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった」と記されているからです。

この物語はここで終わりではなく、後の出来事を語る物語が九章の終わりまで続いています。イエスが安息日に盲人をいやしたことが問題となり、このいやされた人はイエスを非難するファリサイ派の人々から二度も尋問され、会堂から追放されることになります。しかしイエスを非難する彼らに対し、この人は三〇節以下でイエスの奇蹟行為を堂々と弁護したばかりか、主イエスに対する信仰を告白するに至り、神の業が現われたことを証言する者とされたのです。この両者の対照的なイエス理解に対して、三九節でイエスは「わたしがこの世に来たのは、裁くためであ

る。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」と告げています。ヨハネ福音書の特徴は、主イエスの行った奇跡行為の持つ霊的な意味の説明を行っている点にあります。イエスの行ったいやしの奇蹟は、イエスが誰であるか、またイエスがこの世に到来した意味は何かとの問題と深く結びついていることをぜひ覚えていただきたいと思います。